

WHO-F I Cネットワーク会議 2005 東京会議開催概要

WHO Family of International Classifications Network Meeting Tokyo 2005

開催期間 平成17年10月16日(日)～22日(土)

会場 高輪プリンスホテル

WHO主催、社会保障審議会統計分科会共催

(事務局：厚生労働省大臣官房統計情報部)

参加者 WHO、協力センター、日本、オブザーバー等

世界16ヶ国 参加者数約80名

会議主要議題

10月16日(日)

WHO-F I Cネットワーク計画委員会

WHO代表部及び各国代表者の会議(戦略会議)

10月17日(月)～21日(金)

1. WHO代表部及びセンター代表者による会議(戦略会議)報告
2. 各委員会及びワークグループの重点項目討議
 - ・教育委員会(EC)
 - ・電子媒体委員会(ETC)
 - ・国際分類ファミリー拡張委員会(FDC)
 - ・普及委員会(IC)
 - ・分類改正委員会(URC)
 - ・死因分類改正グループ(MRG)
3. 各委員会合同討議
 - ・普及委員会及び教育委員会並びに国際分類ファミリー拡張委員会
 - ・分類改正委員会及び死因分類改正グループ並びに電子媒体委員会
4. 全体会議
 - ・各委員会報告
 - ・ICD(改訂及び今後の計画)
5. ポスター発表
6. DRG及びターミノロジーに関する特別セッション
7. ビジネスプラン及び戦略計画の検討

10月22日(土)

8. 会議報告書草案の採択
9. 会議の評価
10. 2006年会議の場所：チュニジア、10月下旬(調整中)
11. 2007年会議の場所：イタリア、10月中旬(予定)

資料 3 - 2

WHO-FIC ネットワーク会議の主な検討内容

1 国際疾病分類 (ICD) について

(1) ICD の普及について (普及委員会)

ICD の導入評価調査の実施や、普及促進のための新たな協力センター (ナイジェリア、インド、タイ及びマレーシア) の設立が検討され、専門家名簿の作成、ICD に関するトレーニングツール (ICD in a box) の構築等に関する検討が行われた。

(2) ICD の改正 (アップデート) について (分類改正委員会)

ICD の改正内容について、44 の案件が審議され、28 が受け入れられ、9 つが取り下げられ、7 つが継続審議されることとなった。今回は、“avian flu” について、J09 の新コードを設置し、2006 年から適用しその早期普及をプレスを通じて促すことにした。

2007 年に導入することが承認された変更については、2006 年始めに WHO のウェブサイトに掲載される予定である。

注) WHO は ICD-10 の範疇での内容の更新をアップデート (改正) と呼んでおり、ICD-10 から 11 への改訂を示すリビジョン (改訂) と用語を区別して使用している。

(3) 死因分類改正グループ (MRG) について

56 の事項が議論され、その内 29 についての決定がなされ、2006 年 URC への勧告が決定された。

MICAR と ACME 処理に基づく国際ツール (IRIS) のための作業が各協力センター (フランス、スウェーデン、アメリカ、ドイツ) 及びハンガリー統計局によって行われている。

MRG は、死亡データの質の向上の推進のため、新生児データの分類、妊産婦死亡などに取り組み、XX 章の見直しに参加している。

(4) ICD の教育について (教育委員会)

診療録協会国際連盟 (IFHRO) との合同委員会を開催し、教育のためのコアカリキュラムの検討などに関する報告がなされた。また、今回は、初の試みとして、ネットワーク会議に初めて参加する者のためのオリエンテーションを開催し、各委員会の説明や活動報告などを行った。今後は WHO-FIC のウェブサイトにも活動報告などを掲載する予定である。また、それらの活動の資金確保のための作業班が設立された。

2 国際生活機能分類(ICF)について

(1) ICF の普及について (普及委員会)

ICF の普及、利用、教材等に関する情報を共有するための ICF 知識ネットワークについて議論された。情報共有についての枠組みは、WHO のウェブサイトに掲載され各協力センターにもリンクされる。

(2) ICF の訓練と教育 について (教育委員会)

トレーニングツールの開発について報告がなされた。今後は教育的戦略と普及戦略を連携させながら進めていくべきであるとの勧告がなされた。また、2005 年 5 月にタイで行われた ICF ワークショップが国際的なトレーニングの可能性のモデルであると紹介された。

(3) 国際生活機能分類小児青年版 (仮称) ICF Children and Youth version

ICF-CY の作業班によるフィールド試験の実施後、WHO は各センターに対する照会のプロセスに入った。

出来上がった分類は、WHO-FIC の派生分類として位置づけられる予定である。

(4) ICF の改正について

保健ケアの管理には、結果を監視及び評価するための多次元ツールが必要である。ICF は、保健活動結果を評価する上で大きな可能性がある。

保健調査や障害調査の共通枠組みとして利用する可能性や、国民健康評価のまとめなどに使用する簡易書式などの検討、また、ICF 改正のメカニズムの必要性が討議され、ICF のための WHO-FIC 改訂ソフトウェアプラットフォームの適用を勧告した。プラットフォームはWHO のウェブサイトに掲載され、ICF 関連情報はこの共通のメカニズムを通じて集められる。

3 医療行為の分類(ICHI)について

WHO は、ICHI ベータ版のフィールド・テストを実施し、国際的な医療行為の分類の必要性について、総合評価を実施することが重要であることを強調した。最先進国には独自の医療分類体系があるが、途上国の多くはそうした分類がない。フィールド・テストでは ICHI について強いニーズがあることが示された。

4 ラウンドテーブルでのディスカッション

(1) ターミノロジーとのリンク

用語と分類の有用性をはっきりと識別する必要がある。分類と用語は代替的なものではないが、互いに補完的なものであり、既存の科学的知識に基づいた適切なリンクで結合し、使用されるべきである。

(2) DRG/DPC

国際的なケースミックスの専門家によって、現在の使用の評価、促進の方法、システムについて議論された。国際的な比較可能なものにするための作業班が形成される予定である。

5 ICD の改訂について

WHO は ICD-11 に向けてのプロセス案を発表した。

ICD-11 向けには、以下の 3 つの観点から現行の ICD を見直し、必要な修正を図りたいと考えている。

(1) 科学的流れ (Scientific Stream)

根拠に基づいた見直し、調査、バリデーションスタディ等を含む科学的見地から ICD の見直しを行う。

(2) 臨床の流れ (Clinical Stream)

臨床的に有効活用でき、また治療への反応性といった側面にも対応できるような観点から ICD の見直しを行う。

(3) 公衆衛生的流れ (Public Health Stream)

保健医療制度 (サービスの提供、資源管理、償還、会計、情報技術への適用等) への影響を評価する観点から ICD の見直しを行う。

ICD-11 に向けての改訂プロセスの原案が WHO からプレゼンテーションの形で示されたが、より具体的な方針等については、今後企画実行委員会において検討される予定である。

6 WHO-FIC ネットワークの今後の活動について

(1) ネットワーク構成の再編

現在ネットワークは、5 つの委員会と 1 つの小委員会 (MRG) から構成されているが、それぞれの委員会に横断的に関与する作業班を構成する旨の組織改革が提案された。

① Mortality Reference Group 死因分類改正グループ (既存)

② Morbidity Reference Group 疾病分類グループ

死因についてのデータ精度の向上を目指す MRG と同様に、疾病のデータ精度向上を検討するためのグループの構築さて、ケースミックス、病院データなども検討の対象となる予定である。

③ Functioning and Disability Reference Group 機能および障害分類グループ
標準化された ICF のアプリケーションを確立することにより、利用を促進し、また機能及び障害データの国際比較可能性を高めることを目的とする。

④ Terminology Reference Group ターミノロジーグループ

今後ドイツと北欧のセンター長が WHO 本部と共にグループの構築に働くことが確認された。

この組織改革により、これまで URC の下で活動していた MRG は、全ての委員会に横断的に関与することになる。新たに設立される他のグループも同様に横断的な活動が期待されている。

(2) ビジネスプランとワークプラン

① ビジネスプラン

WHO は WHO-FIC ネットワークの活動全体に関するビジネスプランを作成している。2006 年 5 月に、企画委員会メンバーと外部アドバイザーによる年次評価会合が開催される予定である。

② ワークプラン

ビジネスプランに基づき、より具体的なワークプランが作成され、全体会議で発表された。

新規業務、作業者、締め切り等が更新された。

(3) 今後の予定

2006 年の年次会議はチュニジアで開催されることが勧告された。年次会議は毎年 10 月に開催されることになっており、企画調整委員会において、当初 10 月 22 日～28 日の日程での開催が決議されたが、ラマダン（断食月）との関係で現在再調整しているところである。2007 年の年次会合はイタリアで行われる予定である。

サマリーは WHO のウェブ上で公表されている。

(<http://www.who.int/classifications/network/meeting2005/en/index.html>)

資料 3 - 3

WHO-F I Cネットワーク東京会議日本側発表者

ポスターセッション

1. 大津忠弘
厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健統計課課長補佐
“Suicide deaths in Japan”
2. 菅野健太郎
自治医科大学消化器病内科教授
“CD-10 Classification of Gastritis: A Time to Change?”
3. 横堀由喜子
日本病院会通信教育課長
“Improvements on training materials for health information manager in Japan”
4. 西本 寛
大津赤十字病院部長
“Use of ICD-10 and ICD-O for hospital-based cancer registries in Japan”
5. 丸田敏雅
東京医科大学病院助教授
“The issues on classification of the ICD-10, Chapter V”
6. 大橋謙策
日本社会事業大学教授
“Care Management Utilizing ICF and Social Work Practice”
7. 有馬正高
東京都立東部療育センター開設準備室
“Use of ICF in Service Assessment for Persons with Severe Developmental Disabilities”

8. 丹羽真一

福島県立医科大学教授

“ICF in Treatment and Rehabilitation for Schizophrenia”

9. 大川弥生

国立長寿医療センター生活機能賦活研究部長

“The Utilization of ICF in National Legislation and Policies in Japan ”

10. 上田 敏

日本障害者リハビリテーション協会顧問

“Clinical Application of ICF to National Medical Insurance and Personal care Insurance”

日本からの主な発言

○ 藤原研司

横浜労災病院長

“ICD Plenary session”

○ 上村一夫

厚生統計協会会長

“Strategy and Work Plan session”

